

【対談】

「振り返り」で、学びをつなぐ

キャリア教育の専門家、長田徹先生（文部科学省初等中等教育局 児童生徒課 生徒指導調査官）と、長く小学校で道徳科の授業を実践されてきた安井政樹先生（札幌国際大学 准教授）に、キャリア教育と道徳科の学びで重要となる「振り返り」や、学びを自分の将来や生活につなぐことについて、語っていただきました。

撮影：所 直輝

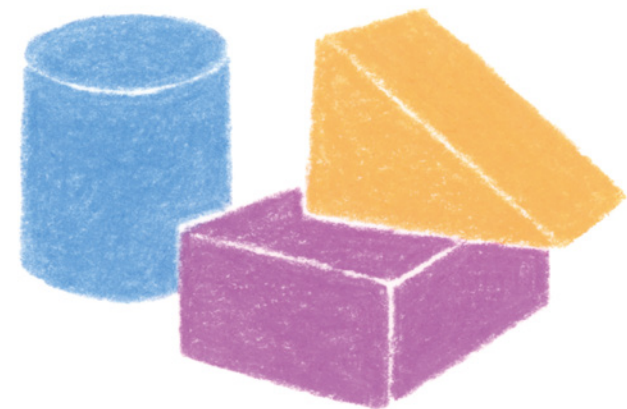


長田 徹 ●おさだ とおる

文部科学省初等中等教育局 児童生徒課 生徒指導調査官。国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官。宮城県・仙台市の公立学校教諭、仙台市教育委員会学校教育部教育指導課指導主事、同確かな学力育成室指導主事として学力向上、キャリア教育を担当。2013年4月より現職。現職では、キャリア教育(進路指導)や特別活動を担当。

安井政樹 ●やすい まさき

札幌国際大学 准教授。北海道・札幌市の小学校教諭を経て、2022年4月より現職。ICT活用や道徳教育、インクルーシブ教育の中でも、GIGAスクール環境を生かした学び、個別最適な学びと協働的な学び、ICTを活用した働き方改革などを中心に研究を進めている。学校教育雑誌での連載、NHK for School道徳番組の監修等も手がける。



キャリア教育の課題、道徳科の課題

長田 現行の学習指導要領を検討していた中教審で、国際的な意識調査において日本の高校生の自己肯定感や社会参画意識が極端に低いことが話題となりました（右図）。先進国にありがちな傾向かとも思いましたが、他の先進国の子どもたちの自己肯定感や社会参画意識は高い。これは、日本にだけ見られる課題です。

安井 4月から大学で教えています。意欲的な学生もいれば、自分に自信のない学生、自分の可能性や課題が見えていない学生もいると感じます。でも、本人のせいというよりは、これまでの人生の中で、そういうことを見いだす機会が少なかったのかなという印象です。

長田 自己肯定感や社会参画意識の低さという課題があって、現行の学習指導要領の「前文」には、「児童生徒が、自分のよさや可能性を認識する」という文言が記されました。どうしたら日本の子どもたちが自分のよさや可能性を認識できるかを、教師が意識するようというメッセージです。キャリア教育に限らず、日本の教育全体が追いかねなければならぬ共通のテーマといえます。

安井 「前文」に記されているということに、強い意志を感じますね。

長田 ええ。また、キャリア教育においては、学校教育の中で行ってきたキャリアについての学びが、自分が将来どう生きるかと結び付いていない。そもそも、学びが自分の将来に結び付くという意識が低いという課題もあります。

安井 道徳科も似たようなところがあります。例えば「礼儀」については、小・中学校の道徳科で考える機会があったはずですが、でも、そういうことを学んできたはずの大学生に、いまだに「挨拶をしよう」と声をかけることもある。「挨拶は大事」と理解するだけでなく、自分の生き方とつなげられるようにしないといけないと実感しています。

何のために、振り返るのか

安井 学んだことを自分の生き方や将来とつなげるためには「振り返り」が重要だと思うのですが、長田先生はどうお考えですか。

長田 学習指導要領では、「振り返る」と「見通す」がセットになっています。なぜ振り返るのかというと、それは確かな根拠をもって、この後の見通しを立てるためです。「自分にはこういうよさや力がある。こういう課題がある。だから、こうなりたい」という見通しを立てるためには、確かな振り返りが必要なんです。

安井 メタ認知ですよ。今の自分がどういう状態なのかがわかって、初めて地に足がつく。自分で今の学びの現在地がわかるようにすることが大切だと思います。その点からいうと、中学校の道徳教科書の巻末にある「学びの記録」（次ページ参照）は、とてもいいですね。

長田 考えたことを蓄積し、一覧で見渡す。これは、自己評価のトレーニングです。これまで、学校での評価は先生からされる評価が中心になりがちでした。日本の子どもたちの自己肯定感や社会参画意識の低さは、これまでの学習評価の在り方に、何らかの原因があったからじゃないか



と思うんです。

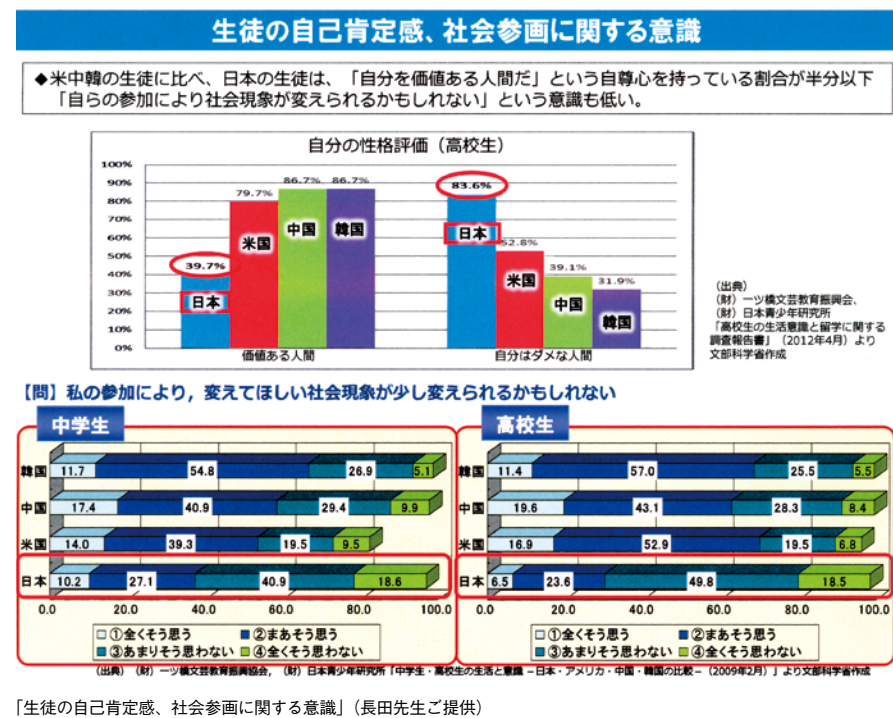
安井 これからは、先生からの評価だけでなく、子どもたちが自ら見通しをもち、学習意欲を高めて、主体的に学ぶために役立つ自己評価も大切だということですよ。

長田 自己評価のトレーニングを積み重ねていくと、自分で自分を励ましたり、叱ったりすることのできる大人になっていくと思います。

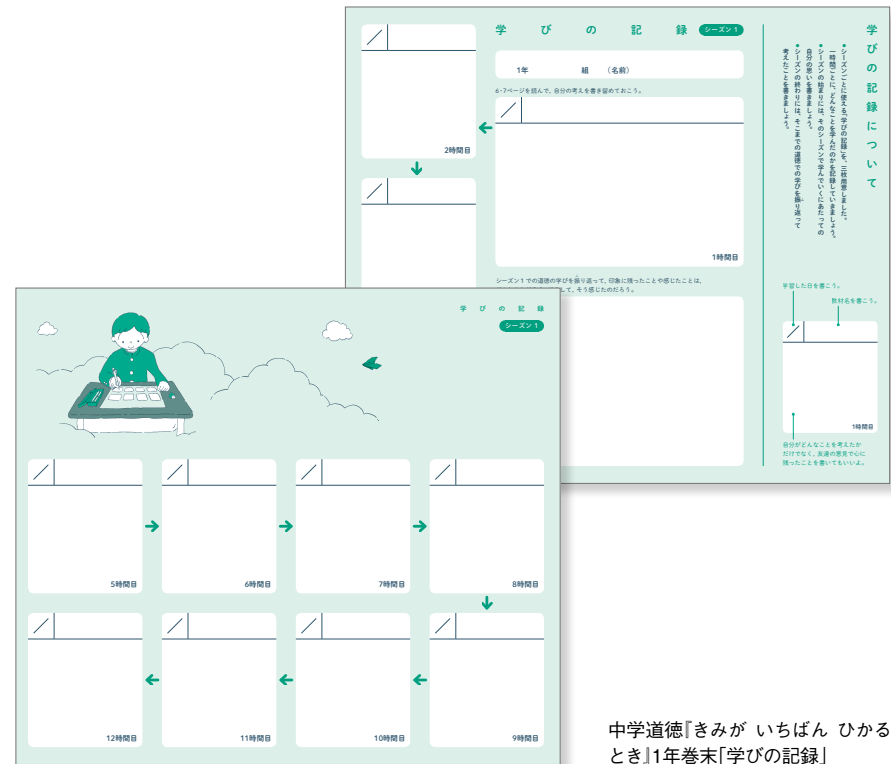
安井 そうですね。ただ、時に道徳科での振り返りは、「主人公のここがすばらしかった」といった、教材の中身に終始してしまうケースがあります。このような振り返りだけでなく、自己評価のトレーニングにはなりませんよね。「似た経験があったときにどうしたいか」「今までの自分と照らし合わせたらどうか」というところまで振り返ることができるようにする必要があると思います。

振り返る視点を育てる

安井 道徳が教科になったばかりの頃、『「親切」とは、どういうことか』といった、内容項目そのものについての教師向けの研修も多くありました。それらも必要ですが、道徳科では、



「生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識」（長田先生ご提供）



中学道徳「きみが いちばん ひかる
とき」1年巻末「学びの記録」

親切とは何かを語る子を育てたいわけではありません。「親切」という窓口から自分を振り返って、生活に生かせるようになってほしいんですよね。

長田 そのための手立てとしては、どんなものがあるんでしょう。

安井 教材に向き合うときに、自分とのつながりを意識できるようにすることだと思います。「思いやりが

大切」という発言があったら、私は「そう思うきっかけがあったの？」と尋ねるようにしていました。その考えが、「誰かがそう言っていた」という、他者に与えられた知識から出てきたのか、「自分もそう感じた経験があった」という、内なるものから出てきたのかでは、同じ発言でも、意味が全く違うからです。

長田 自分の考えの根底にあるもの

を振り返るということでしょうか。

安井 はい。また、普段の生活の中で、内容項目と関連した言葉を使って言葉がけをすることも大切です。ごみを自主的に拾っている姿に対して、「ごみを拾ってえらいね」ではなく、「クラスのみんなが気持ちいいね。こういう人がいっぱいいると、町のみんなも気持ちがいいだろうね」と声をかける。

長田 子どもたちの姿を捉えて、学びと自分の将来や生活とをいかに結び付けるかも、ポイントですね。

安井 他にも、その教材が多面的・多角的な見方をする事に向いているのか、自分との関わりで考える事に向いているのかを吟味しておく必要はあると思います。ワークシートに「今日の学びを振り返ろう」と書いてあっても、漠然と振り返ることになってしまいますから、教材に応じて、あえて振り返り方に軽重をつけてもよいのではないのでしょうか。

つなげて自覚する振り返り

安井 キャリア教育でも振り返りをしますよね。どんな工夫が考えられ

るのでしょうか。

長田 いろいろありますが、私がいつも現場の先生方にお話ししているのは一つ。「学校生活の中に散らばっているキャリアの断片が、実はつながっている」ということを見えるようにしてほしいということです。学校での学びの中には、国語、算数、行事といった、各教科や領域の垣根がありますが、その中には、大人になったときに役立つ力がたくさん含まれている。

安井 道徳科も同じです。学校生活の中に、道徳的な要素はたくさんあります。

長田 でも、その断片全てをその都度取り上げていたら、教科や領域の学習がもちません。それに、垣根の中にいる子どもたちにとっては、国語は国語、行事は行事といった印象が強い。だから、年に1、2回、「各教科や領域での学びが、実は自分が将来生きていくことにつながっている」ということを自覚できるようにしてほしいんです。

安井 断片をつなげて見せるというのは、道徳科の「大きくくりなまとま

りでの評価」と関連させられそうですね。教師による「大きくくりなまとまりでの評価」だけでなく、子どもたち自身が各学期や1年間の単位で1時間ごとの学びをつなげて見つめ直す。そうすると、「〇年生の道徳科で自分がいちばんよく考えたのは、これだな」と振り返ったり、「今年は△△のことも考えたい」と見通しをもったりできそうです。

長田 つなげるという点でいうと、特別活動の振り返りと道徳科の振り返りを時系列で整理してみたら、特別活動と道徳科の学びがつながっていることがわかるかもしれません。そういうのを子どもたちに見せてあげられたらいいですね。

安井 実は学校現場では、学びを振り返る時間が、年間指導計画にきちんと位置づけられていないこともあるんです。教育課程において振り返りが重要な意味をもつ時代が来ているなら、1時間丸ごと振り返りの時間としてもよいのではと感じました。振り返ること自体が学びだということもできるのではないのでしょうか。

これまでの振り返りを「キャリア・パスポート」に生かす

長田 令和2（2020）年から、キャリア教育の一環で「キャリア・パスポート」の取り組みが始まりました。「キャリア・パスポート」という名前ですが、本来はキャリア教育に限定せず、自分の成長を自分で振り返ることができるようにしようという、学校の本質的な部分に関わる取り組みです。現場ではどのように受け止められているのでしょうか。

安井 学校現場では、これまでも年度初めに目標を立てたり、年度末に1年の振り返りをしたりしています。ただ、今までは、それが「点」としての取り組みになってしまっていた。その「点」と「点」をつなげて、子どもが成長を感じられる取り組みに変えようということだと捉えています。だから、私自身は、特別新しいことをするというイメージではなかったですね。

長田 安井先生のおっしゃるとおりで、文部科学省でも「キャリア・パ

自分で今の学びの現在地がわかるようにすることが大切だと思います。

——安井



「学びが、実は自分が将来生きていくことに
つながっている」ということを自覚できるように。

——長田



スポーツ」の例は示しましたが、それはあくまで「例示」。内容や様式の指定はないので、各学校で使ってきた作文用紙やシートを活用していただいていいんです。例えば、その学校の様式で年度初めに書く目標シート1枚、年度末の振り返りシート1枚、その他、行事などで書いた感想シートの中から子ども自身が2枚、先生が1枚選ぶ。そうやって1年間で5枚のシートをためていくだけで、小・中学校の9年間で45ページもの「キャリア・パスポート」になります。

安井 小学校1年生のときのものと、6年生のときのものを見比べたら、自分が成長していることが、ひと目でわかりますよね。たとえ、字が間違っていたとしても、それも含めて自分の成長を実感できそうです。

長田 「キャリア・パスポート」は、自分で自分のよさや可能性を認識するための道具です。誰かに評価してもらうものではないので、わざわざきれいに書いたり、新たに書いたりする必要はありません。すでにあるものを活用してもらえたらと思います。

安井 中学校の教科書の「学びの記録」を切り取って、そのまま「キャリア・パスポート」に挟んでもいいですね。

わたち 轍となつてつながる

長田 「キャリア」の語源はラテン語で、「轍」という意味です。だから、キャリア教育の本質は、学校での学びが、轍となって自分の将来につながっていくことを意識して指導しようということなんです。

安井 小・中学校の道徳科では「勤労」について考えますが、内容項目の「勤労」＝「キャリア教育」と捉えるだけでは、考え方が狭くなりそうです

ね。

長田 はい。「勤労」について考えることが、キャリア教育の一部になりうることには間違いはありませんが、もっと広く捉える必要があると思います。実際に、教科書の中にはキャリア教育に関わる教材がたくさんありますし、道徳科を中心としてキャリア教育を進めようと研究している学校もありますよ。

安井 教師が、道徳科の中に点在するキャリア教育の要素をつなげて捉えようという意識をもつことが大切なのかなと思いました。でも、こういうことを考えれば考えるほど、そういう自分はちゃんとできているのだろうか、心がきゅーっとなりますね。

長田 私も、もともとは中学校の教員でしたから、安井先生とお話をして、「あのときの道徳の授業、ああしていたらよかったなあ」と、反省するところもありました。

安井 長田先生とお話をして、私も改めて「こういう教育をしたい」という気持ちが湧いてきました。今回は、子どものキャリア教育の話をしてきましたが、実は、大人も自分自身のキャリア教育の真っただ中にいるのかもしれないね。

道徳授業を成功させよう

知って役立つ発達心理学

渡辺弥生

Yayoi Watanabe
(法政大学教授)

第④回 人はなぜ、時に望ましくない行動を取ってしまうのか

「いじめはよくない」という規範意識は、小学生でももっています。ですが、実際には、クラスの中でいじめが起きていることは少なくありません。その原因は一つではありませんが、子どもたちが自分を律することが難しいことにあります。

自分を律する力を弱めてしまうメカニズム

人には、自分に「非」があると考えのを回避しようとするところがあります。自分の落ち度を最小限にしようとするのです。

この原因として、四つのメカニズムがあると考えられています。下の図を参照ください。

①は、望ましくない行為を引き起こす「行為の再解釈にかかわるメカニズム」です。例えば、「平和のために戦おう」「未来のために戦おう」という表現は、「道徳的正当化」に当たります。戦争を煽るリーダーは「人を殺めに行こう」とは決して言いません。民が心地よいと感じる言葉を巧みに用いるのです。

「リストラ」を「適正規模化」という婉曲的な言葉に置き換えたり（婉曲な名称づけ）、政治家が悪政を行った人を引き合いに出して比較し、自分を正当化すること（緩和的比較）も、自分の行為の再解釈です。

②は、望ましくない行為や有害な結果をもたらすことにつながる「行為と結果の因果作用の曖昧化にかかわるメカニズム」です。「赤信号 みんなで渡れば怖くない」（責任の拡散）という意識や、親自身の問題を子どものせいにする（責任の転嫁）などがそれに当た

ります。

③は、有害な結果をもたらすことにつながる「結果の無視にかかわるメカニズム」です。例えば、便宜供与した政治家が、具体的な計画や実行は秘書などに任せるといった場合、政治家本人は実際に行動していないことから、比較的、結果を無視することができ、罪悪感も弱くなります。

④は、「被害者の価値づけにかかわるメカニズム」です。相手を自分と対等な存在、同じ気持ちや価値観をもつ存在として位置づけなかったり（非人間化）、自分が悪いのにもかかわらず、相手に原因を求めたりすること（罪の転嫁）をいいます。

人には、こうした自分を律する機能を弱めてしまう働きがあることを、まずは理解しましょう。そのうえで、自分や他人がそうした行動に陥っていないかを判断する目をもつことが必要です。

ただし、このような道徳的な判断や行動のコントロールは、大人でも難しいことです。ですから、ここで紹介したような事例を取り上げ、子どもたちに「あ、よくやっちゃっているな」「自分が正しいと思っていただけ、間違いだ」と気づかせることが大切です。

渡辺弥生 ●わたなべ やよい

発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体——発達心理学で気持ちをマネジメントする』（筑摩書房）、「子どもの「10歳の壁」とは何か？ 乗り越えるための発達心理学」（光文社）など。監修に『まんがでわかる発達心理学』（講談社）など。光村図書小・中学校『道徳』教科書編集委員。

